

「諫曉八幡抄」

いま にち れん い けん ちよう ご ねん みずのとうし
 今日蓮は去ぬる建長五年癸丑
 し がつ に じゅう はち にち こ とし こう あん さん ねん
 四月二十八日より今年弘安三年
 たい さい かのえ たつ じゅう に がつ に
 太歳庚辰十二月にいたるまで二
 じゅう はち ねん あいだ また た じ ただ みよう ほう
 十八年が間又他事なし、只妙法
 れん げ きよう しち じ こ じ に ほん 国 の 一
 蓮華経の七字五字を日本国の一
 さい しゅ じよう くち い ばか
 切衆生の口に入れんとはげむ計
 り なり、こ すなわ ちは は あか こ くち
 りなり、此れ即母の赤子の口に
 ちち い じ ひ
 乳を入れんとはげむ慈悲なり

(御書585ページ)

通解

今、日蓮は、去る建長5年4月28日(の立
 宗の日)から、(本抄を著した)今年弘安3年
 12月に至るまで、28年の間、他事は一切な
 い。

ただ妙法蓮華経の七字五字を日本国の
 一切衆生の口に入れようと励んできただけ
 である。

これはちょうど、母親が赤子の口に乳をふ
 くませようとする慈悲と同じである。

友への励ましが自身の力に

よくわかる解説

本抄は弘安3年(1280年)12月、日蓮大聖人が59歳
 の時に、身延で門下一同のために著された御書です。

本抄では、大聖人の御生涯について説かれています。
 大聖人は立宗宣言から、本抄を書かれるまでの28年
 間、ただひたすらに南無妙法蓮華経を説き続けました。

ささまざまな難に遭う中、大聖人が南無妙法蓮華経を説
 き続けられたのは、一切衆生を救いたいという大慈悲が
 あったからです。御文では、母親が赤子に乳を与えようと
 する姿に例えています。私たちにとっては、友人の話を聞き、
 悩みに寄り添うことが、大聖人の慈悲の姿に通じます。

ドイツに『モモ』という物語があります。主人公のモモ
 は小さな女の子で、もじゃもじゃの髪の毛以外、これと
 違って目立つ子ではありません。しかし、彼女が唯一得意
 だったのが「話を聞くこと」でした。友達の話を聞き続け、

受け入れる。不思議なことに、物語では多くの問題がこれ
 で解決をします。町に住む人々の中で、「モモのところに
 行ってごらん!」という合言葉ができるほどでした。

年度が替わると、環境も変わります。わくわくすることが
 たくさんある一方で、新しい生活への不安も感じると思い
 ます。そんな時だからこそ、勇気の一步を踏み出して、友達
 の不安や悩みを聞いてみてはどうでしょうか。じっくりと
 話を聞き、真剣に祈っていくことは、友達にとって、大きな
 支えになるはずで。

池田先生はおっしゃっています。「人に『生きる力』を与
 えるのは何か。それは、自分以外のだれかのために生きよ
 うという『人間の絆』ではないだろうか。(中略)『人のた
 め』に行動する時、その時に、自分自身の生命の泉も蘇生
 していくのです」

さあ、新年度が始まります。友達と励まし合いながら、
 最高のスタートを切っていきましょう!